

1954年における函館朝市に関する記録

渡 辺 英 郎

函館朝市は函館観光の人気スポットとなっており年間約200万人の観光客が訪れて賑わっている。

函館朝市について関心を持つ市民は多いのであるが、函館朝市に関する記録は極めて少ないようである。

筆者は1954年（昭和29）に函館朝市に興味を持って調査したことがある。この内容は、函館朝市に列車を利用して野菜などを搬入する乗客について調べたもので、函館朝市に関する歴史的資料なので報告する。

1、行商列車を利用した野菜供給

都市近郊の農家が野菜や花卉などを生産してその生産物を都市で販売する経営方式は近郊農業と呼ばれ、函館付近でも早くから行なわれてきた。

1954年（昭和29）における函館市の人口は約23万人で、隣接する亀田、七飯、大野、上磯の各町村は野菜の供給地となっていた。

近郊の農家が函館市内へ野菜などを供給する方法としては、①馬車を利用する方法、②荷車・リヤカーを利用する方法、③旅客列車を利用する方法の3種に分けられる。

筆者が注目したのが、③旅客列車を利用した供給方法である。

旅客列車の運転区間は森駅発～軍川経由～函館駅間である。

運行時刻は、森駅発 5 時42分、軍川駅発 6 時51分、函館駅着 7 時40分であ

る。

旅客列車は毎日運行され、通勤客・通学生などの一般客のほかに、野菜運搬者・魚類運搬者が乗車した。

この旅客列車には運搬者専用車両を増結していたので、野菜運搬者・魚類運搬者たちはこの専用車両に乗車した。

また、列車には季節的に臨時に運搬者用の車両が増結されることもあった。

運搬者たちは行商と呼ばれていたことから、この列車は「行商列車」とも呼ばれた。また、行商人の中には水産物などの荷物を「ブリキ缶」に入れて運んでいたことから運搬者たちは「ガンガン部隊」とも呼ばれていた。

森駅から乗車した運搬者の多くは魚介類を、軍川駅、渡島大野駅、七飯駅などから乗車した運搬者は野菜、果物、花卉などを背負ったり、両手に持って列車に乗り込み、函館駅で下車すると、背負ったり、両手に持ったり、あるいはリヤカーに積んで、函館市役所前の広場まで運んで小売販売した。当時の朝市は函館市役所前の広場における青空市場で開かれていたのである。

行商列車を利用して、朝市へ運搬した人たちの多くは定期券を求めて運搬していたところから、この定期券利用者について調査した。

2、調査内容と方法

軍川、渡島大野、七飯、大中山の各駅に出向いて、各駅で保管している旅客賃月報と、定期券購入申込書から、利用者数、居住地、年齢、性別を調査した。

そのほか七飯村大中山で池田乙太郎氏から聴取した。

3、調査結果は表1および表2である。

表1、青果物運搬のため定期券購入者状況（昭和28年4月から29年9月までの期間にそれぞれの月に定期券を買い求めた人数である）

駅 名	昭 和 28 年											昭 和 29 年								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月		
大 中 山	9	8	8	10	14	19	15	13	29	22	19	16	8	8	8	7	11	12		
七 飯	40	43	47	78	147	99	53	54	59	46	41	61	43	30	49	64	136	119		
渡島大野	36	38	18	137	216	131	78	50	63	41	38	46	33	33	116	111	173	143		
軍 川	17	22	22	37	39	30	27	30	26	18	19	27	27	31	30	38	36	28		
合 計	102	111	95	262	416	279	173	147	177	127	117	150	111	102	203	220	356	302		

表2、青果物運搬者の性別・年齢別状況

年 齢	利 用 駅			
	七 飯		渡 島 大 野	
	男 (人)	女 (人)	男 (人)	女 (人)
10歳以上20歳未満	7	5	1	3
20～30	14	16	5	11
30～40	13	21	7	15
40～50	9	23	7	15
50～60	8	14	13	15
60～70	4	4	3	5
70～80	1		1	3
計	56	83	37	67

4、考 察

表1から言えることは次のことである。

定期券を購入して運搬する人は1年中存在する。

定期券購入者数には季節差が見られる。8～9月が多く最大月で416人。

1～5月は少なく最小月で102人である。この傾向には年次差は認められない。

運搬者の総数は、少ない月で約100人、多い月で400人を越える。

駅別でみると、多い駅と少ない駅が認められる。最も多いのは渡島大野駅で216人、次いで七飯駅が147人、軍川駅39人、大中山駅29人である。

表2から七飯駅利用者も、渡島大野駅利用者も男性よりも女性が多い。年齢では10～70歳と幅広いが、30～60歳が主力である。

5、結 び

大野村、七飯村などの函館近郊の農家は自作した農産物を早朝の列車を利用して運搬し、函館の朝市で小売販売している。

運搬者が利用した列車は、森～函館間を運行する森駅発5時42分、軍川駅発6時51分、函館駅着7時40分である。

列車には運搬者専用1車両が連結されており、野菜や魚類運搬者たちは専用車両に乗車していたことから、この列車は行商列車と呼ばれた。

運搬者の大半は通用期間1ヶ月間の定期券を購入していた。この人数は、夏季の多い月には400人を越えており、冬季の少ない月でも100人を越えた。運搬者数は普通乗車券を利用して運搬した数を考慮すると多い月には500人近い数であった。

運搬は周年行われているが、運搬者数は季節と関係があり、生産物の収穫期には多く農閑期には少なくなる傾向がある。

運搬者は30歳から60歳代が多く、男子も女子も従事しているが、男子よりも女子のほうが多い。

函館近郊の農家にとって朝市は、自家生産した野菜、果物、花卉などを自ら運搬して販売する自然発生的な市場として機能していた。

函館近郊から朝市へ周年供給を可能にしているのがこの地域の温暖な自然条件である。

（これは1954年10月に道南高等学校社会科研究会で、函館近郊農業地域に関する二三の地理学的考察として口頭発表した一部である。）